Meisei University

フランスと日本への眼差し

――篠澤秀夫『フランス三昧』にこと寄せて――

和田正美*

一　フランス學のこと

丁度三年前のことであるが、私はこの研究紀要の第九號のために「フランス學雜感・序」を執筆した。フランス學といふのはフランス文學者の桑原武夫などが提唱したものを田邊保などが發展させようとしたものであり、要するに、フランス研究を、フランス文學の研究とかフランス美術の研究とかいつた個別的、限定的なものにとどめるのではなく、もつと總合的、全體的な、そしてそこにフランスの本質が浮び上る底のものに高めようとする學のことである。私はこの主張に何がしかの疑義を呈しながらも、一方では、さういふものがあつて然るべきだといふ心持ちも抑へ難く、右の小論の中で、田邊保編『フランス學を學ぶ人のために』を材料にしながら、フランス學について私なりの素描を試みた。

しかし私はこの試論を一回發表しただけで打ち捨てておいた。その理由はこのテーマが今の私にはいささか荷が重いと感じたことと、それだけに、時間の助けを借りてこれが私の中でもつと熟するのを待つた方がよいと考へたことであるのだが、どうやら時間はこのことで、私を助けるのとは逆の作用を及ぼしつつ進んだやうである。このテーマへの興味と關心は、フランスのことにだけかかづらつてはゐられないといふ私の現狀も手傳つて、次第に薄れて行つたのだ。

そこへ篠澤秀夫『フランス三昧』が姿を現したのである。これを一讀した私は、フランス學といふ、半ば忘れてゐた言葉を再び意識の上に載せてゐた。實際、この新書判の小册子はこれこそフランス學の、少なくとも土臺を形作る好著であるやうに思はれる。この本の中で篠澤はフランス學といふ言葉など使つてゐないが、この名稱にこだはるとすれば、三年前に私がフランス學の在り方に思ひを凝らしてゐた時には、それが『フランス三昧』におけるやうな形を取り得ようとは思つてゐなかつた。田邊その他に見られるフランス學は、暗默の前提として、研究者の共同作業によつて構築さるべきものであるが、篠澤はフランスの諸事萬般を一人で引き受けてゐる。實際、この書は著者の篠澤がフランスの文學にも思想にも歷史にも、またフランスの社會制度にも、またフランス人の日常生活の樣相にも通じてゐることを遺憾なく感じさせ、そして篠澤はそれら諸々のフランス的なものを、フランスの何たるかを知らず、フランス語をまつたく解さない一般讀者にわからせようとしてゐる。啓蒙の本義はかういふところにあるのではないか。自らここには桑原武夫的、田邊保的な、そこでは素人の讀者を寄せつけない學問臭はなく、フランスはその生きた姿で私達日本人の前に開かれてゐるのである。

しかし私見によれば『フランス三昧』の最大の特徴はそのことではな

* 言語文化學科　教授　日歐近代文學

NII-Electronic Library Service

Meisei University

い。この書の中ではフランスのみならず、日本も生きてゐる。これは當り前のことのやうに見えながら、實際には、なかなかさうは行かないのである。日本の研究家がフランスを論じたものの中にすぐれたものがあることは言を俟たないが、さういふのは別として、日本人の手になるフランス論は屢々フランス讃美の裏側に日本への侮蔑感を忍ばせてゐるやうである。これはどうしたことだらう。ことによると日本のフランス學が眞先きに心懸けなければならないのは、そのやうに日本から遊離したフランス派知識人の眞姿を描くことなのかも知れない、といつた皮肉の一つも言ひたくなる。

その點、篠澤秀夫はフランスに深くかかはりながら、フランスを是、日本を非としたりはしてゐない。篠澤においてはそれどころか、フランスと日本は多くの點で似てさへゐるのである。もとよりこの書が目指してゐるのは、日本ではなくフランスの姿を明らかにすることであるが、それでもこれは大層間接的な意味合ひでの日本論として讀めないことはない。

さう考へて、以下に『フランス三昧』の中のフランスと日本を見て行くことにするが、ここから先、フランス學といふ言葉はもう使はないつもりである。

二　自己完結の風土

フランス人の基本的な意識を表すものとして自己完結といふ言葉が『フランス三昧』の中で繰り返し使はれてゐる。その意味は、自分達は必要なものをすべて所有してゐる、だからこれ以上は要らない、もし外部から入りこんで來るものがあればそれは同化し得る場合を除いて排除すべきである、とでもいつたところであらう。篠澤秀夫によれば、この自己完結とそれに結びつく中央集中及び心理的自己滿足が歴史を通してフランスには見られるのである。

フランスのかういふ特徴は研究家の誰もが氣づくことであり、問題はそれをどう評價するか、或は、その原因を何處に求めるかといふことであらう。前者の評價について言へば、これを故としてフランスを好まない人もあらうし、私の中にもこれを疎ましく思ふ氣持がないわけではないけれど、その點、篠澤はこれを、理非を超えた事柄と見做してゐるやうに思はれる。フランスといふ國の成り立ちが自己完結的な性格を導いたと篠澤は考へてゐるらしい。古來、フランス人はドイツ人とは違つて、ライン河を自然の國境と見做した。その結果、「フランスの現在の國土は、歴史を通じて、フランスから見てフランスの安全を確保するのに充分な範圍をすっかり取り込んでいる。（中略）國土についての心理的自己完結性が實現している[1]」のである。

植民地の問題にも自己完結があると篠澤は言ふ。フランスはイギリスとの植民地獲得競争に敗れて、インドとカナダで植民地を失ひ、その上、ナポレオンは北アメリカのルイジアナ植民地を歐州での覇權の確立を目指してアメリカ合衆國に賣却した。このことでは、「やはりフランスは一八世紀の植民地獲得競争に敗れ、革命とナポレオン戰争を通じて、大陸で自己完結を果たした[2]」といふのが篠澤の説明である。

もつともこの説明からは、何故、ナポレオン以後のフランスが植民地の獲得に血道を上げ、アルジェリア植民地を百三十年もの間支配したのかといふ、その理由が充分に傳はつて來るとは言ひ難い。篠澤の自己完結理論はもう少し練り上げた方がいいやうな氣もする。

とはいへ、現在のフランス人には植民地をなくしたといふ喪失感がな

NII-Electronic Library Service

Meisei University

く、かつて植民地を持つてゐたことが國民生活に痕跡を殘してゐるとはほとんど言へないといふ指摘はこの理論にとつて有利であると考へられよう。

ところで右の短い引用文の中には「革命」の語がある。どうやら篠澤にして見れば、一七八九年に始まつた革命こそ、フランス的自己完結の最たるものであるらしいのである。篠澤の主張を最も端的に表す一節を引用しておく。[3]

> 革命はフランスの自己完結の實現であったのだ。變革ばかり重んじる從來よくあった評價は單純に過ぎる。革命議會は、「第三身分がすべて」「第三身分＝國民＝愛國者＝フランス人」という新しい觀念構造に照らして不整合なものを排除し、自己完結する意志を常に表明した。

これはたしかに斬新な見方である。革命のさなかにあつたフランスがそれに干渉しようとする諸外國と戰はなければならなかつたことは周知の事實であり、その點から推して、篠澤が革命に一つの大きな自己完結を見たことが誤りであるとは思へない。篠澤流に考へると、フランスは革命において最もフランス的に振舞つたことになる。

しかし篠澤が、ヴァンデ住民絶滅命令といふ、革命政府の殘虐性を强調したことはどんな內的動機に基いてゐたのだらう。外敵に對峙してゐた政府が國內の治安の維持に腐心せざるを得なかつたことを考慮に入れても、これは革命の暗面を物語る出來事でしかない。フランスの自己完結それ自體は理非を超えてゐるのかも知れないが、それを遂行しようとする意志の中には邪惡なものが潛んでゐることもあるといふ教訓を私達はこの記述から讀み取ればよいのだらうか。

ところで私にはフランス人の心的傾向に關して以前から疑問に感じてゐたことがある。革命が「第三身分＝國民＝愛國者＝フランス人」といふ新しい觀念の上に立つてゐたのなら、何故、革命後のフランスにナポレオンのやうな獨裁者的人物（敢へて「獨裁者」とは呼ばない）が登場したのかといふ疑問がそれである。さう言へばルイ十四世もド・ゴールも多かれ少なかれ獨裁者的人物であつたらう。この疑問に對して『フランス三昧』が明確な解答を示してゐることはまことに喜ばしいと思ふ。フランス國家發展の求心力は國王の存在であり、その傳統が革命以後にも續いたといふのである。國王とそれを擁する宮廷こそフランスの中心であり、この場合の國王はイメージであつて、個人ではない、と篠澤は言ふ。イギリスとの百年戰爭を經てフランス人の間に芽生えた國家觀念も國王の存在と分かち難く結びついてゐたとのことである。

ここで日本とフランスの對比が問題になる。『ロマンチック國家』の中で日本の明治維新に注目したジャン・プリュミエーヌは『菊と刀』のルース・ベネディクトが、「日本人は戰爭中でも、政府や最高司令部から直接の上司まで批判していたが、天皇には觸れなかった」と述べてゐることを受けて、次のやうに記したのださうである。[4]

> ルース・ベネディクトの比較論を少し延長して、長いあいだ君主制だったフランスの政治姿勢に同じような向性を見分けられないか。フランス人も、必要のときにそれに訴えようと、上位の權威を尊敬するという本質的傾向に富んでいないか。そのような權威は、すべての權力の上に位置し、それらの權力とは一種別の性質を帶びているのだ。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

篠澤は日本とフランスは似てゐるといふ持論を様々のやり方で論證しようと努めてゐるが、これがその一例であり、彼はプリュミエーヌと共に、フランスは一七八九年の革命によつて、日本は一八六八年の、それとは違つた革命によつて國民國家を創設し、現代史に登場したと考へるのだ。兩者いづれの場合にも、權力の上の權威の尊重といふ、長年培つて來た傳統が物を言つてゐるといふのである。

これはさう言はれればさうかも知れないと思はせられる議論であるが、それにしても、フランス革命が、フランス史においてそれほど重要な役割を果したところの、國王といふ上位の權威を一旦根本から否定した事實を私達はどう受け止めればよいのか。私自身はプリュミエーヌの著書を讀んでゐないので即斷は出來ないが、篠澤の引用だけではそこのところがよくわからない。

わからないといへば、フランスに見られる自己完結性が日本に當てはめられる、その度合ひについても同じである。假に右のことで日本はフランス同様、自己完結してゐると思做すことが出來たとしても、それ以外のことではどうだらう。日本はその歴史を通して、外國の存在を、少なくとも外國からの刺激を必要として來た國であり、その意味で自己完結をしてはゐなかつた。いふまでもなく鎖國は外國の存在を強く意識した行爲である。自己完結の一事において、日本はフランスに似てゐるかも知れない面とまつたく似てゐない面を併せ持つてゐる。日佛比較はむづかしい作業であらう。

しかし篠澤が日本とフランスの間に接點を見出ださうとする試みはなかなか面白いので、次章はそれを中心にして考察することにしたい。

三　戰爭がもたらした虚妄

前章でフランス革命のことに觸れたが、今のフランス人に、フランス史上最大の出來事は何だと思ふかとたづねたら、多くの人が、それは革命だと答へるだらうと思はれる。一方、日本人にフランスを日本に替へた質問をしたら、この場合の回答はまちまちであらうが、その中で最も多いのは明治維新なのではあるまいか。私自身が逆の立場に立たされた時のことを想像すると、明治維新と答へたくなる氣持を無理に抑へて、それは二次大戰での敗北だと答へたいやうに今のところ感じてゐる。

といふのも日本の敗戰は通念に反してアメリカの日本侵略の結果であり――だからといつてそれをしたアメリカを頭から惡者扱ひしてゐるわけではないのだが――アメリカの日本占領統治はアメリカのそのやうな意志に見合ふ形で行はれ、古い日本は破碎されたからである。このことでは戰前の日本と戰後の日本を別の國、別の社會であるとする考へ方があることも承知してゐる。しかしこの二つの間に斷絶ばかり見ようとすることはおそらく正しくない。連續してゐる面もあると考へなければならない。明治維新にも、そしてフランス革命にも多分同じことが言へるであらう。

重要なのはことに臨む人の姿勢であり、人生論的立場である。彼はそれに應じて、斷絶と連續の入り組みをさばかなければならない。その點、『フランス三昧』の篠澤秀雄がアメリカによつていぢられるより前の日本の價値をしつかり把握してゐることは立派である。戰前の日本を暗黑國家呼ばはりするやうなフランス研究家は實は戰後の日本にも猜疑の眼を向けてゐるのだとしか思へない。さういふ態度を通して彼にフランス

NII-Electronic Library Service

Meisei University

がよく所有され得ると考へられようか。

フランス史の初學者は他ならぬフランスの國土の中にフランス以外の君主國が幾つかあることを知つて最初は戸惑ふが、これは國王を以て「貴族の代表」に過ぎないとする古來の慣習に基づいてをり、そこでフランス國王が他の諸國を或は軍事的征服によつて、或は結婚によつて、或は遺贈によつて併合し、遂に統一フランスを作り上げるまでの道筋を辿ることが學習の要點の一つになる。篠澤がこのことで好箇の實例として擧げてゐるのはフランスのブルターニュ併合である。ブルターニュの女公爵アンヌは一四九一年にフランス國王シャルル八世と結婚し、それから迂餘曲折を經て、三十三年後の一五二四年にブルターニュは正式にフランスの一部になつた。

ここで興味深いのは篠澤がこのやうな領土併合劇を「國引き」といふ古風な言葉で表してゐることである。フランスの成り立ちは國引きの話に滿ちてゐる。いや（篠澤はそこまで述べてはゐないが）國引きはヨーロッパ史の至るところに見出だされるであらう。アメリカ合衆國が國引きの結果として出來上つた國であることは誰でも知つてゐる。ところが日本では——

出雲の神様、大國主命が島に綱を掛け、引っ張って來て領土を廣げる「國引き」の神話は、敗戰後、進駐軍（占領軍）の命令で排除された日本神話の中でも、とりわけ「侵略的だ」と目の敵にされたのか、今の若い人は知らなかろう。しかし神話は文明の中にある。遮斷し切れるものではない。ただ、そういう「文化的シャッター」は數十年單位では無殘な效果がある。今こそ、日本文化を病的にしている、古臭い穴だらけになった「戰後シャッター」を取り除くときだ。(5)

よく考へて見よう。大國主命の國引きは、そこに歴史的事實の反映があつたとしても、それ自體としては神話である。一方、フランスその他の國引きはれつきとした史實である。さうすると私達は國引きの神話を持つてゐるといふだけの理由で、他ならぬ國引きの當事者達から侵略的として斷罪され、奇妙なシャッターを掛けられたことになる。

フランスに學ぶとはフランスについての知見を深めるだけでなく、フランスの本質を私達日本の本質に對比させ、さうすることを通して、フランスとのつきあひ方をおぼえることでもあらう。そしてフランスはアメリカとロシアをもその中に含むヨーロッパの一部である。もう使はないと約束したフランス學なる語を敢へて再び持ち出せば、フランス學はヨーロッパ學の一部として存在させるべきであり、そのヨーロッパ學はヨーロッパ人の善惡を、そのよかれあしかれ術策に滿ちた生き方を私達に知らしめるものでなければならないであらう。ヨーロッパをひたすら美化し、理想化した文明開化の迷妄から私達が拔け出すことが出來るのは蓋しさういふやり方によつてだらうと思はれる。

私が嫌ひな國際化といふ言葉に一度だけ義理立てをしておくと、右のやうな手續きを經ないで日本の「國際化」が計れる筈はないのである。

ところで大國主命の國引きの神話といふ場合の「神話」は文字通りの意味であるが、この語には、「誰もが正しいと思ひこんでゐる作り話」といつた幾分通俗的な用法がある。次に取り上げる事例の中では篠澤もこれをさういふ意味で使つてゐる。問題は自國の戰爭とそれの處理であり、篠澤は「日佛共通の問題」と言つてゐるが、見方によれば、日本は紛う方のない敗戰國なのだから未だしもあつさりしてゐるが、フランス

NII-Electronic Library Service

Meisei University

は實質的には敗戰國であるといふのに形式的には戰勝國として振舞つたのだから、その病巣はより深いといへよう。

以下に篠澤の要約を私が更に要約して示すことにする。

一九四〇年にフランスはドイツ軍に降伏し、その結果、フランスの北半分にはドイツの軍政が敷かれ、南半分にはペタンを首班とするフランス國家（いはゆるヴィシー政權）が誕生する。かつて軍隊でペタンの部下だつたド・ゴールはイギリスに逃れて、自由フランスといふ名ばかりの亡命政府を作り、ラジオ放送を通じてフランス人にドイツへの抵抗を呼び掛ける。一九四四年に連合軍がパリに迫ると、ド・ゴールは連合國軍の最高司令官であるアイゼンハウアーの許可を得て、「自由フランス」のルクレール師團にパリを解放させる。そこに何が起つたか。

解放後、まだドイツ軍の空襲や砲擊の危險があったにもかかわらず、ド・ゴール將軍は凱旋門からシャンゼリゼ大通りを群衆に圍まれて行進する。この瞬間、「自由フランス」こそ正統なフランスであり、ずっとそうだったのだ、という神話が確立する。(6)（傍點、引用者）

篠澤の言ふ通り、これは如何に「必要な芝居だった」とはいへ、あくまで「大芝居」である。ところがこの芝居によつて定着せしめられた「神話」の幻想にたぶらかされたフランス人は內輪で殺し合ひを始め、ジャン・ポーランによれば死者の數は七萬人に上るといふ。フランス人が讀むわけではない文章の中にこんなことを書くのはをこがましいのだが、このていたらくはフランス人によくよく反省してもらひたい事柄である。

それでは日本はどうなのか。私達の國では戰後の混亂期に人々が殺し合ふことまではなかつた。戰犯とされた人々の遺族を初めとする戰沒者遺族が有形無形の壓迫を蒙ることはあつたとしてもである。それが流血の慘事に至らなかつたことは私達の救ひであるとは言へるかも知れない。しかし右に述べた壓迫を助長しがちな、しかも追ひ々々强固になつて行く神話はやはり根づいた。往時の日本は侵略に明け暮れる惡しき國家であり、大多數の國民は政府と軍部の統制に不承々々從ひ、敗戰を機にして崇高な自由と民主主義と平和主義が初めて生まれ、かうして日本はやうやくまともな國家になり始めたといふ、呆れ返つた神話がそれである。(7)このことをめぐつて篠澤は次のやうに述べてゐる。

實情を知らず一方的な神話だけ聞かされて育つ戰後生まれの世代は、當初から傷つけられた心で育っているのだ。まさに日佛共通の問題ではないのか。

その通りだと思ふが、このやうにフランスと日本の現實を同時に見据ゑる態度は研究家として當然のことでありながら、案外、今まではそれが充分には執られて來なかつたのではないだらうか。フランスをむやみに褒めることも、またその逆にフランスをひたすら貶しめることも、フランス人を人間扱ひしないことであり、そのやうな誤りを免れるためには、「日佛共通の問題」を發見することは一つの有力な方法であらう。篠澤によればそれは、たとへば中央集中・中央集權制のやうな、戰爭處理以外の事柄の中にも存してゐる。もつとも幾ら篠澤が日本とフランスの類似を說いても、私の見るところでは、この二つは似てゐる以上に異なつてゐるのであり、だから「日佛共通の問題」を提示するのは必ずしも容易なことではないだらうけれど。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

四　ケルト人とフランス人の間

以下で扱ふ問題はケルトといふ言葉をかかへこんでゐる。『フランス三昧』はフランスのことをよく知らない人々のために書かれたものだが、これを讀まないで、いきなり拙論に目を通す讀者の中には、ケルトやケルト人と言はれてもピンと來ない人がゐるだらうと想像されるので、最初に手短かな解説の筆を執ることにしよう。

今のフランスは西暦紀元前にはローマからはガリア、土地の人々からはゴールと呼ばれてゐたが、そこに住んでゐたのは古代の大民族ケルト人の一派である。彼等は一頃、盛んな勢を示し、前三九〇年にはローマを劫掠するほどであつたが、次第に力關係が逆轉し、前二世紀から一世紀に掛けてガリアの地はローマに攻略され、遂に前五七年にシーザーによつて全ガリアがローマの支配下に置かれた。新しいガロ＝ロマン時代の始まりである。五百年後に、この地は、ローマを滅ぼしたゲルマン人の一派であるフランク族に征服される。しかしフランク族は少數であり、特に女の數が少なかつたので、現地人と混血融合せざるを得ず、かうしてゲルマンの血はケルトの血に呑みこまれてしまつた。だから今日のフランス人は、かつてガリア人（ゴール人）と稱されたケルト人の子孫なのである。

ここに文明、及びその中で重要な役割を果たす宗教の問題が現れる。篠澤はローマ化以前のガリアについて、「ケルト暮らしの長さは縄文暮らしに匹敵」するやうだと述べてゐるが――さうすると約一萬年だらう――當時のガリアの人々は生命を讃える多神教（ドルイド教）を信じ、泉水、樹木、洞窟、丘陵、山岳などの自然を崇敬してゐた。ところがガロ＝ロマン時代に入つてから、周知の通り、ローマ帝國は四世紀にキリスト教を公認し、その結果、この宗教はじわじわとガリアの地に滲透して行く。ケルトの多神教は徐々に驅逐された。フランク王國初代の國王のクロヴィスは妻にすすめられてキリスト教（カトリック）に改宗し、かうしてカトリック・フランスが姿を現したのである。

ここから先のことを一々記す必要があるだらうか。ともかくフランスはローマ教會に對して忠實だつたところから「教會の長女」とさへ呼ばれるやうになり、十六世紀の宗教内亂に際しては一五九八年のナントの勅令で一旦プロテスタントを條件付きで認めながら、十七世紀にそれを取り消してカトリック一本に戻る。それほどの傳統を持つキリスト教を十八世紀の革命は否定したが、それにもかかはらずカトリックの傳統は死に絶えず、今日に至つてゐるのである。

フランス文明を目して、それはキリスト教文明であり、カトリック文明であるとする見方が特に誤りであるとは私には思へない。フランス人は千何百年もの間、カトリックの教へと共に生きて來たのではなかつたか。近代、現代の、或は反逆的な、或は難解な思想もキリスト教的な神の觀念を媒介とすることなくして語ることは出來ないもののやうに見受けられる。

が、それなら、キリスト教以前の、一萬年も續いたと推定されるケルト文明はどうなつてしまふのか。今やその痕跡はフランス人の精神の中にも、生活の中にも見出だせないと決めつけてよいのかどうか。篠澤はこの疑問を受け止める形で次のやうに述べてゐる。(8)

フランス人にとってはケルト文明のおおらかさを。日本人にとっては日本的なものを「田舎くさい」と卑下する劣等感の拂拭を。「近

NII-Electronic Library Service

Meisei University

代の超克」は近い？

讀者は私の右の略述から、往古のガリアにおけるケルト文明の姿が、始原的な、それでゐて今日尙命脈を保つてゐる日本文明の姿に、少なくとも表面的には、酷似してゐることに氣付いたであらう。日本とフランスは似てゐるといふ篠澤の主張の心理的根據の一つはこのことの中にあるのかも知れない。ローマに、ゲルマンに、そしてキリスト教に侵されるより前のフランスは日本と同じやうなところだつたといふ思念が篠澤にはあるやうに見える。そして篠澤はフランスのために、そのケルト文明の復權を唱えるのである。

自ら篠澤がキリスト教を見る眼は嚴しい。

日本人の宗教觀にある見かけのチャランポランさは日本的特殊性ではなく、ケルト文明にもあった。それをキリスト教で削ぎ落とされた。中世を通じてやがてそれは苦しみとなり、それに逆らった近代化にも、キリスト教的嚴しさがあったのではないか。(9)

ここにはチャランポランといふ俗語が記されてゐるが、これは日本人が「神さびたもの」への敬意だけを手掛りにして神にも佛にも手を合せる、そんな態度を評してかう述べたものであり、篠澤はそれでいいのだと言ひ切つてゐる。そもそもこの文の中では、キリスト教がケルト文明のチャランポランさを削ぎ落したとされてゐるが、篠澤は一方では、ガリアに入つたキリスト教にしてもイスラム原理主義から見ればチャランポランだと述べてゐる。マリア像に燈明を供へて見たり、土着の女神が姿を變へたやうなマリア像「黑マリア」があちこちの教會にあつたりすることは、よく考へると、たしかにキリスト教の本旨から逸脫してゐるであらう。聖母崇拜が太古のヨーロッパの農耕的な豐穰神に對するキリスト教の妥協の產物であることは他の研究家によつても明らかにされてゐる。

しかしキリスト教にはケルト的な明るさがない。そこで篠澤は、自然に神を見る、肉欲の蔑視を知らない、大らかでチャランポランなケルト文明が復活したら、それは低迷しがちなフランス文明に新しい福音をもたらす筈だと說くのであるが、さあ、どんなものだらう。そんなことになつたら、それはフランス史のみならず世界史上の大事件であり、フランス人が喜ぶだけでなく、日本人にとつても「仲間」がふえたといふ大層うれしい話にならずにはゐない。しかしさういふことが眞實可能なのであらうか。

私はフランス文化をその中に含むヨーロッパ文化のアマチュア研究家として、常々、ヨーロッパを解く鍵はキリスト教にあると考へてゐる。キリスト教はヨーロッパ人の野蠻な生命力を抑壓することを通して實はそれを解放した、といふのが私の持論である。實際、キリスト教によつて平均化されなければ、ヨーロッパが世界史をあれほど動かすことはあり得なかつたのではないか。世界史と書いたが、この中には勿論、日本史も含まれてゐる。ヨーロッパ人としては、文化・文明が低迷したら、一旦、キリスト教の筋を想ひ起すことが自然なのではあるまいか。まさかケルト文明もキリスト教文明も、といふわけには行かないであらう。

もつとも、ここまでは素通りして來た言語の問題がある。篠澤は、「文字と文化財に支えられた國民意識があるかぎり、その國民の言語を破壞することはできない。フランス語も日本語も破壞されはしない。もはや古代ケルト人の時代ではない」と言ふ(10)のだが、この問題の入口に辿

NII-Electronic Library Service

Meisei University

り着いたところでこの小論を終らせなければならないことを讀者に御詫びしておく。

註

底本は次の通りである。

『フランス三昧』篠澤秀夫著・中央公論新社・二〇〇二年五月三十日再版

(1) 十一頁
(2) 一八六頁
(3) 一九三―一九四頁
(4) 一八〇頁
(5) 三十頁
(6) 二一四頁
(7) 二一七頁
(8) 二三四頁
(9) 二三一―二三四頁
(10) 二一二頁

NII-Electronic Library Service